

アナザーリンク

アズマケイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アナザーに感染した鬼塚の幼馴染に憑依した話

アナザーリンク

目

次

アナザーリング

目が覚めたら知らない天井だった。驚いてあたりを見渡すと点滴の準備をしていた看護師と目が合つた。

「鐘井さん、鐘井さん大丈夫ですか!?」

確かに俺は鐘井だけど、と言いかけた声はかすれて音にならない。長らく音を発していない喉は音の出し方を忘れてしまったようだ。彼女はあわてて水を差しだしてくる。促されるがまま喉を潤すと、ちよつとだけ音のようなものが出了。よかつた、声が出ないわけじやないらしい。

「失礼します」

白衣の男性、看護師、名札から大学病院の医者だとわかる。どうやら主治医のようだ。彼らは心底安心したように笑いかけた。ぼんやりとしているこちらを見て、無理もない

「どうしてここにいるのか説明し始めた。

「君はアナザーウイルスに感染したんだ」

まるで意味がわからんぞ状態である。なんで遊戯王VRAINSに出てくるキー
ワードが出てくるんだ? 疑問符が飛んでいく鐘井はもつと詳しい説明を求める。彼ら
からもたらされるのは既知の情報ばかりだ。

デュエルモンスターズができるネットサービス、リンクヴレインズ。SOLテクノロ
ジー社が提供しているこのサービスは、今、クラツカー集団であるハノイの騎士から標
的とされており、ユーザーにむけて悪質なウイルスプログラムがばらまかれているとい
う。

勝手にユーザーの精神をリンクヴレインズに拉致し、昏睡状態にするというプログラ
ムだ。今でこそワクチンが生成され、被害者は次々と目が覚めているものの、手口はき
わめて悪質。

彼らはリンクヴレインズを守るために日夜活躍しているPLAYMAKERという
ハツカーを執拗に探しており、そのあぶり出しのためにユーザーを感染させていたの
だ。旧型デュエルディスクをもち、デュエルの腕があり、なおかつ若いデュエリスト。

そしてハツカ一であること。

ネットのアバターである。実際は男かもしれないし、女かもしれない。そのため旧型デュエルディスクを持つている強いデュエリストが最初は狙われたが、ハノイの騎士に入団した有象無象がそのあぶり出しという名目のために暴れ回ったため今リンクブレイinzは無法地帯にある。もはやハツカ一じやなくても目についたデュエリストを片つ端からアナザーにしている状態だった。

「君は不幸にもその被害者となってしまったんだ。目が覚めてほんとうによかつた」

旧型デュエルディスクを渡される。デツキは『星杯』デツキ。たしかに愛用しているデツキだが、待つてほしい。鐘井はOCG次元の決闘者であり、断じてリンクヴレインズのユーザーではない。おかしくないことは、この世界がアニメの世界だと自覚できる自分が証明してくれる。それを伝えようとしたが、動搖していると勘違いされたようで落ち着きなさいといわれてしまう。

「早く学校に行けるようにリハビリ頑張りましょーね」「学校?俺、学校なんか:」

先生は肩をたたく。

「何もいわなくていい、今は体を治すことに専念しなさい。さいわい、この件に関してはSOLテクノロジー社から見舞金という形で治療費は出る。お金の心配はいらないよ」「これ、お返ししますね。いつもはロツカーに入つてますから」

看護師に渡されたロツカーの鍵、中には鐘井の鞄がある。財布やスマホ、仕事用の手帳などいろいろ入っている。よかつた、と鐘井は安堵した。自分の記憶違ひじやないという物的証拠がある。だが先生は険しい顔のままだ。鐘井は疑問を飛ばすしかない。

「たしかに君は大人びてる。でも大人というには少々無理があるんじゃないかな」

ますますわからなくて疑問がとんでいく。物的証拠があるのにかわいそうな子供を見る目になるのはなんでなのか、鐘井はわからなかつた。精神病院などを紹介されるわけじやないから、おかしくなつているというわけではないようだが。会社にどう言い訳しようと考えながらつないでみるが通じない、マンションの管理人などに連絡を入れて

も通じない。おかしいが積み重なり始めたころ、手を洗おうと鏡を見た鐘井は絶句した。

「ち、ちぢんでる」

どうみても10代後半だ。どういうことだ、まるで意味がわからんぞ！混乱しているとやたら騒がしい音がした。

「入るぞ！」

どつかで聞いたことがある声だつた。走らないでください、静かにしてください、看護師の声がよく響く。がらがら、と乱暴に扉が開かれた。そこには鬼塚豪快がいた。でつけえ、とぽかんとしている鐘井に鬼塚はずかずかと近づいてくる。あとから息を切らせて走つてきたと思われる親友の君島マコトがあとから顔を出した。

「やつと見つけたぞ、祐樹！」

「お、鬼塚」

「なんでここにって顔書いてあるな。俺だつてびっくりだ！まさかアナザーに感染して入院してるとは思わなかつたぞ！今までどこほつつき歩いてたんだ!!」

「君まで被害者になつてるなんて思わなかつたよ。でも、よかつた。ずっと探してたんだよ、みんな。帰ろう？」

「帰るつて、どこに」

「どこつて決まつてるだろ、俺たちの家にだよ!!」

ぐい、と腕をひかれたところで、看護師たちがあわてて入つてきた。

「お待ちください、皆さん！落ち着いて！鐘井さんのお友達ですか？」

「友達？違うな、俺たちは家族だ」

「え」

「あ、えーっと、俺たち同じ児童養護施設の出身なんです。祐樹は5年前、突然出て行つたきりずっと行方不明だつたんですよ」

「まあ、そうなんですか！それなら、よかつた、引き取り手が見つかつてよかつたですね、

「鐘井さん」

「ど、突然いわれてもなにがなんだか」

「さつきからどうしたんだよ、祐樹。みんな怒つてないよ、心配しなくていいって」

「……実は鐘井さん、アナザーから回復しても記憶が戻らないんですよ」

「え」

「でもさつき俺のこと鬼塚つて！」

「そ、それはテレビをみたから…」

「ほんとか？」

「くくうなずく。事実だからだ。なんだその設定。知らないぞそんなの。戸惑っている鐘井を見て、鬼塚と誠は顔を見合させる。

「何も覚えてないのか？」

「どのあたりから？」

「目が覚める前のことは全然」

「ここはもう嘘も方便というしかない。鐘井祐樹という同姓同名の別人と間違えているのかもしれないが、顔を合わせているのに違ったという反応が一切ない。むしろ5年もたつているのにすぐにこいつだと断言して看護師の制止がなければすぐにでも連れ

て帰ろうとしている鬼塚たちの反応からしてどう見ても別人説はなさそうだ。

「まじかよ」

「つてことは5年間のことはある」と覚えてないってことか」

「アナザーによつて記憶が混乱する例はあるんですが、ここまで長期にわたる記憶喪失は例がありません。もしかしたらと思って調べてみたのですが、どうやら鐘井さんはアナザーに感染させられた時、データストームに巻き込まれて滑落したようでした」

「ログアウトする時にデータに損傷が!?」

「はい、フラツシユバツクの一種かと」

「そんな」

「大丈夫なのかよ、祐樹」

「だから覚えてねえつてば」

「あ、そつか」

「記憶が戻る可能性は?」

「わかりません、ここまでひどい損傷は前例がありませんから……私たちも全力は尽くしますが今の段階ではどうとも」

「……しかたねえな。じゃあ、教えてやるよ。二度と忘れないようによく覚えとけ。俺

は鬼塚豪快、おまえの幼なじみだ。リンクヴレイinzで俺のデュエルを観戦してたつてことはやっぱ心のどつかでは覚えてるんだろうな」

「僕は君島マコト。同じ児童養護施設の出身でさ、君が家出する前、一緒に部屋だつたんだよ。今は施設を出て一人暮らししてるんだ」

「先生、祐樹がここに運び込まれたのはどういう状況で？」

先生の顔が険しくなる。そして、少し言いよどんだ。

「鐘井さん、ロツカーのものを見せてもかまいませんか？」
「え、あ、はあ」

鐘井は訳のわからないまま鍵を渡す。ロツカーから鞄が出され、いろいろと並べられていく私物。なんだか持ち物検査みたいで恥ずかしいが、どんどん鬼塚たちの顔が険しくなっていく。超怖い。何したんだよ、この世界の俺。まあまあ、今の祐樹は覚えてないんだし、とマコトがなだめる。

「祐樹、よかつたら一緒に住まない？」

「え」

「えってなんだ、えって」

「いやだつて、俺、金」

「やだなあ、そんなこと気にしないよ。みんなずつと心配してるんだ。チラシ配りとかずつとしてたんだよ、僕たち。思い出せないんだからそれでいいじゃない。大事なのはこれからだよ、豪快。違う？俺たちのこと覚えてなくとも、祐樹は祐樹だろ」

「……そう、だな。それもそうか。ま、今度どつかいたらただじやおかねえからな」

もしかして非合法の個人情報を取得して他人として生活していたとでも勘違いされたんだろうか、鐘井にとつてはあの鞄こそが本来の自分のだが。大事に鞄を抱える鐘井を見て鬼塚がため息をつくのがなんだかいたたまれなかつた。

数日の検査入院のあと、鐘井は児童養護施設に戻つた。先生たちには喜ばれ、子供たちにはじやれつかれた。そして、マコトの住んでいる家に連れて行かれたのである。遊作が不法侵入したマンションそのものだつた。

「ここの一一番左の部屋だよ、狭いけど。不動産屋には話通してあるから心配しないでね」「お、おう、ありがとう」

「ここ」に来るまでに買ったたくさんの荷物を抱えて、二人は階段を上がった。

「いる人が家事しようか」

「お、おう」

「今日は祐樹の退院祝いってことで俺が作るから、待つてて」

「あ、ありがとう」

「たいしたもの作れないけどな、あんまり期待しないでよ」

「ごめん、ありがとう」

「緊張しなくてもいいって。今日からここが祐樹の家でもあるんだから」

「そう、だな、うん」

マコトはうれしそうに笑った。

「僕さ、うれしいんだ。祐樹もデュエルモンスターZ続けてるってわかつて。その『星杯』施設出る前のやつでしょ？よく覚えてるよ」

どうやらこちらの世界の鐘井も『星杯』の愛用者だつたようだ。

「出て行つちやつても、『星杯』デツキだけは持つて行つてた。今もこうして大事に持つてる。それが一番うれしいんだ。アナザーになつたのだつて、リンクヴレインズのアカウントつもつてないとそもそも感染しないしね。デュエルモンスターズ大好きなのは変わらない。それは僕がよく知つてる祐樹だ。なにもかわらないよ、あんしんしていい」

「お、おう、ありがとう」

「それでさ、僕もデュエルモンスターズ始めたんだ。結構やるんだよ、僕。よかつたらデュエルしない?」

「いいけど」

「やつた、負けないからね」

鐘井は口元がほころぶのがわかつた。

「俺に勝つなんざ10年はええつてこと教えてやるよ」

デュエルにデッキ調整をしたら、もうすっかり深夜である。明日は学校だ、とマコトが寝静まつてから、まだ眠れない鐘井はひとり隣の部屋でぼんやりとしていた。

（いつまでたつても夢から覚めねえ。どういうことだ？この体の持ち主はどこ行きやがった？）

「ますたー！」

びくっと肩が揺れる。知らない男の子が飛び出してきたのだ。

「よかつた、よかつたです、目が覚めたんですね！」

「……誰だっけ？」

首をかしげると、えええっと大きさに男の子は反応した。

「わ、忘れちゃつたんですか！？ ば、僕ですよ、僕！ アウラム！！ サイバース族のアウラム！」

鐘井は半透明な男の子に見覚えがあった。

「アウラムつてあの『星杯』のアウラム?」

「び、びっくりしたあ、覚えてるじやないですか!」

「精靈?」

ぴしつと男の子は凍り付いた。

「なんで精靈?」

「デュエルモンスターーズの精靈じやねーの?」

「ちが、ちがいますよおつ!僕のことからかってるんですね!?僕はお化けでも精靈でもないです!AIです、えーあい!人工知能!自己学習能力がとても高い自我があるAI!!サイバース族はみんなそうだつていつてるじやないですかあつ!!」

「自我があるAIつて、イグニスじや?」

「あれ、僕、イグニス様の話をしましたつけ?」

「もしかして、サイバース世界はイグニスだけじゃなくて、サイバース族のやつらもいて、そいつらもAIなのか?」

「そうですよ！僕たち『星杯』の場合は僕だけがサイバース族なので、イグニス様には劣りますが一番知能があるんです。一族の代表という形になります。僕の場合は『星杯の剣士アウラム』というデータが自我を得た形になります！」

「デジモンかよ」

「デジモンってなんですか？」

「ようはコンピュータウイルスの一種つてことだろ？」

「ますたーを感染させた奴らと一緒にしないでください！たしかに僕たちは周りのプログラムに自我を持たせる効果があるつて危険視する人たちもいますが、僕たちみたいに人間と友好的なサイバースもいるんです！」

「熱弁振るつてくれるとこ悪いんだけどさ、俺、鐘井祐樹じやないぜ」

「え？な、なにいつてるんですか、ますたー。ますたー、ここにいるじやないですか」

「ログアウトしたら赤の他人の体とかどこのB級ホラー映画だよ」

「そんな……」

アウラムは今にも泣きそうな顔をする。

「やつと、やつと恩返しできると思つたのに」

「恩返しつて？」

「イグニス様がサイバースを隠匿後、サイバース族はハノイにデーターごと抹殺されてきました。僕の前の持ち主もハノイのせいでひどい目に遭つて、僕たちを手放しました。サイバース族が入つているデツキつてことで曰く付きになつてしまつて、僕たちはずつとさみしい思いをしてきたんです。まして、僕の存在がばれたら間違いなく狙われるところになりますから。でもマスターは僕たちを選んでくれました。だから僕たち一生懸命頑張つてきたんです、マスターに褒められたくて。僕のことも受け入れてくれたから。あのショーケースの中ですつと僕たちデュエルできるみんながうらやましくてたまらなくて」

「…ちょっと待て、それどこの店だ？」

「×の×支店です」

「やっぱお前俺のデツキじやねーか、精靈じやねーか」

「だから違いますってば！」

「記憶がごつちやになつてるぞ、アウラム。お前を買つたのは事実だぜ、『星杯』デツキがすんごい安い値段で売られてたからさ。相性がよかつたのか勝率高かつたから愛用してたけど、俺はこの世界の人間じやない」

「?ますたーのいつてる意味がよくわからないです。僕が逃げ出したのは5年前です

よ、忘れちゃったんですか？ハッキングしてSOLテクノロジー社の研究を盗み見てた
ますたーの回線に僕が逃げ込んだんじゃないですか。それで、一緒に逃げてくれるつて
ことになつて、それで」

「おかしい、おかしい、買われた記憶があるのになんでネット回線がどうのつて話になる
んだ」

「…………??？」

「お前が落ち着けよ。最初の記憶は何だ？」

「ますたーが僕を買つてくれました。最初は代行天使と混ぜ混ぜしてて、今はそれに
パーミッショソの要素が加わりました」

「最近の記憶は？」

「ハノイの騎士にデュエルを挑まれて、ますたー、アナザーに感染しちやつて……僕たち
のことかばつてなにもいわなかつたから、僕たちは助かつたんですけど、うう」

「俺、いくつ？」

「え、×歳ですよね？大人向けのデュエル大会たくさんでてましたよね。……あれ、でも
マスターは17じや？あれ??」

「もしかして、俺のデツキにいた精霊としてのアウラムと、こつちの世界のサイバースと
してのアウラムの記憶がごつちやになつてんじやねーのか。精霊世界に本体はいて、

こつちには分霊がたくさんいるって話だし、今のお前には2体分のアウラムの記憶が混じつてんじやねーのかな。あるいは本体から送られてきてんじやねーか？必要な情報つてことで。落ち着いてよく考えてみろ。そして教えてくれ、俺、全然わかんねえ」「は、はい、わかりました」

「……本来なら俺もこつちの世界の記憶がねえとおかしいって話だが、どうなつてんだ？」

たっぷりとした沈黙が降りた。

「落ち着いたか、アウラム。こつちの世界の俺はなんで目を覚まさねえ？お前をかばうつてことになつて、施設を抜け出して、5年間何してたんだ？」

アウラムはようやく落ち着いたのか話してくれた。

「SOLテクノロジー社をハッキングして、サイバースとかについて調べてました」「ほうほう」

「でも……アナザーの時にばれちゃつて」

「ありや」

「それで……」

「未だに誘拐されたままってことか、なるほど。わかつた、こっちの世界の俺を助け出せばいいんだな。なんで俺がログインしたかはわかんねえけど、なんとなく察したぜ」

「え、あ、い、いいんですか」

「たぶん、俺がここにいるのはこっちの世界のアウラムがお前を通じて俺にヘルプを求めたつてことだろ、たぶん」

「たぶん、そう、かなあ？」

「うし、そなりや善は急げだ。今日から頑張ろうぜ、相棒」

アウラムはぱつと顔を輝かせた。

「よろしくお願ひします、ますたー！」

まさか警察にまで怒られることになるとは思わなかつた。

どうやらこちらの世界の鐘井は不正に取得した住民票を使い、夜間学校をに通いながら働いていたようだ。学歴はすでに高校卒業程度となつていて。そして本来働いてはいけないアンダーグラウンドな世界で金を稼ぎながらサイバース族たちを秘密裏に保護していたようだ。

警察や自治体の処置により中学卒業程度となるよう5年間の学歴はそのままスライドさせてもらえるようになつた。

デンシティでは高校まで学費が無償だと知った鐘井はマコトと同じデンシティハイスクールに季節外れの転校することになつた。一応こちらは大学まで出て新社会人としてスタートした身だ。高校入学の試験は勉強すればなんとかなるのだ。

ただ時期的に中途半端すぎると二学期からの転校となつた。

「なあ、マコト。俺、バイト探すわ」
「え、バイト？」

「ずっと世話になるわけにもいかないし」

「いや、ダメだよ」

「え」

「前科あるのに何言つてるのさ」「

「は?」

「祐樹は二学期から高校生、今はまだ中卒なんだよ?どうやつてアルバイトするのさ。まさかこの戸籍を使うつもり?これだよ、これ。よく潜り込めたね。検索しても出てこないあたりほんとは何してたか怪しいもんだけど」

ばしばしカバンを叩かれて鐘井は頬をかく。

「だから俺は」

「覚えてないんでしょ?」

「うぐ」

「履歴書がいるないバイトつてあるのかな」

「さ、探してみるさ」

どんどん小声になつていく鐘井にマコトは呆れ顔だった。

「どうしてもつていうなら先生に手伝つてもらつたら？」

「大丈夫だつて」

「だからあてはないのになんでそんなに自信満々なんだよ、まさかこの履歴書使うつもり？ダメだつて、先生に叱られただろ！」

「そういうなよ」

「ダメだつて、豪快にいうよ？」

「それだけはやめてくれ」

「もー、豪快宥めるの大変だつたんだからね？」

「ごめんて」

「ごめんで済んだら警察はいらないんだよ」

「うう」

「アルバイト決まつたらどこか教えてね、見に行くからさ」

「お母さんかよ、おまえ！」

「そうでもしないと許可降りないとと思うよ」

「未成年の弊害いい」

「言つとくけど今まで大人として働いてた祐樹が悪いんだよ」

「だから違うんだってええ、誤解だ！」

「じゃあどこの会社でどこにあつて、どうやつて勤め始めたのか教えてよ」

「ぐあつ、んな無茶な」

「じゃあ諦めて」

「し、仕方ねえなあ。わかつたよ！」

わあん、と大げさに泣き始めた鐘井を置いてマコトはいつてきますと出て行つてしま
う。さすがにずっと居候は嫌だ。皿を洗い、洗濯物を干し、履歴書片手にアルバイトを
探し始めた。

「よし、これでなんとか」

施設の先生にも相談していけそなところを吟味する。高校入学見込みならなんと
かOKしてくれるところを見つけることができた。マコトが帰ってきたとき、どうだ、
と直接で仕事の説明をしたいと電話で合格だと教えてもらえたところを並べた。

「先生が許可だったら大丈夫じゃない？どこにいきたいの？」

「んー、清掃とかかな」

「SOLテクノロジー社の？すごいじやない」

「あと一個くらいは欲しいな」

「大事なのは学校だからね、サボつちやダメだよ」

「わかってるよ」

「アルバイトもいいけどさ、勉強忘れないでよ。特別処置だからって課題たくさん出でるんでしょ、祐樹。ちゃんと高校行けるように頑張つてよ、一緒に学校行きたいんだから」

「わかってるよ」

「わかってるなら今すぐやろう、僕も宿題するから」

「わからなかつたらアドバイスよろしく！」

「自分で頑張つて

「えー」

鐘井はがつくりと肩をおとした。

「そうだ、マコト。お前、友達にお礼いとけよ」

「え？」

「たしか、藤木、藤木遊作だつたかな。お前と同じ学校の制服をきてたから学校の友達だろ？お前がアナザーになつたとき、救急車呼んでくれたのはそいつらしい」

「藤木遊作？」

マコトは不思議そうに首を傾げた。誰だつけ？

「ん、違うのか？」

「マコトって大会優勝したりしてんだろ？マコトは知らなくても藤木くんだつけ？そいつが知つてるとか？」

「あー、なるほど」

「僕部屋で寝てたのになあ」

「俺が来たときには空いてたぞ」

「うわ、僕鍵開け放しだつたのかな」

「アナザーになると勝手にログインするんだろう？ マコトどっかに出かけるつもりだつたんじやね？ お腹すいてよくコンビニいくじやねーか」

「あ、なるほど」

「どのみち鍵開けっ放しで出かけてたことになるな、気をつけろよ」

「うん、ごめん、気をつけるよ。今はただでさえ祐樹がいるのに」

「おいそれどういう意味だ」

鬼塚とマコトは笑った。そして、翌日、鐘井はホワイトボードにデカデカと漢字を書く。

「鐘井祐樹です。アナザーに感染したせいで転校が遅れました、よろしくお願ひします」

ペコりと頭を下げるとなばらな拍手がとぶ。まだまだアナザーから回復して間もないクラスメイトが多いのか、教室はガラガラである。

「それじゃあ鐘井は適当に席についてくれ。まずは連絡事項から始めるぞ」

ホームルームがはじまる。鐘井はとりあえず真正面の席に座つて先生の話を聴き始めたのだった。

チャイムが鳴る。

「よお、転校生！俺は島直樹つていうんだ、よろしくな！」

「よろしく、島くん」

「あー、いいつていいつて島で。君付けはなんだかむず痒いからな！」

「じゃあ俺も鐘井でいいぜ、よろしく」

「おうよ！」

鐘井が旧式デュエルディスクをしていることに気づいた島がにやにや笑う。早速話を振つてみると案の定乗つてくれた。

「よくぞ聞いてくれました！実はなー、こないだ発売されたばかりの最新式デュエルディスクなんぜ！リンクヴレインズにも優先的にログインできるし、いいぜ！もし欲しがつたらデュエル部来いよ、今は休止中だけど再開したら部長にかけあつてやるからさ」

「マジで？ すげーなデュエル部」「実はここだけの話、SOLテクノロジー社の財前つてやついただろ？ こないだ失脚したやつ。うちのデュエル部に妹がいてさ、そのコネでもらえたんだ」「そうなのか、へー」

「鐘井もリンクヴレイinzやつてる？」

「おう、やつてるぜ」

「おー、まじか！ ならフレンド申請していいか？ デュエルしようぜ」

「おーけー、今から送るわ。アカウントID教えてくれよ」

鐘井が島から教えてもらつた番号で検索をかける。

「……え、あ、え？」

思わず二度見する鐘井に島は嬉しそうだ。鐘井が反応したのはブレイブマックスのコメントがよろしくお願ひしますというデフォルトのままであり隠す気が微塵もなかつたからだ。ファンタムに誘拐されたとき島直樹だとネットで個人情報を叫んでいたのにすごいメンタルである。

「ちょっと待て、島、なんだよこのアカウント。まさかほんとに？え？」

「ふつふー、気づいたやつたか！」

「あたりまえだろ、気づかないわけあるかよ！・プレイブマックスってあれだろ、ハノイに勝ったやつ！」

「そう、俺こそが playmaker の意思を受け継ぐ予定の男、プレイブマックスだぜ」

鐘井がファンタムに誘拐されたときのことまでは知らないと踏んだ島はどこかほつとしている。嫌いになれないやつだなあと思いつつ、鐘井は話をつづける。

「おー、まじかーこれは登録させてもらうぜ！なー、『サイバースワイザード』見せてくれよ」

「残念ながらそれはできないぜ。俺はまだ playmaker から認めてもらうために修行すべきだと考えて playmaker に返したからな」

「え、あ、そうなのか。それなら仕方ねえな、でもすごいな島、playmaker と会つたことがあるんだろう？ いーなー」

「いいだろー！」

「よかつたら教えてくれよ、色々！」

「いいぜ、なんでも聞けよ」

ウインクを飛ばす島に鐘井は頷いた。

「へー、『クローネ』つてのが鐘井のアカウントか？どういう意味？」

『クローネ』は外国の通貨なんだだけどさ、もとは王冠つて意味があるんだよ。なんか
かつこよくね？」

「なるほど、そういうわれるとかつこいいな！」

「だろー？ブレイブマックスもなかなかだと思うぜ」

「さんきゅー鐘井！お前いいやつだな！それじやついでに学校案内してやるよ。いこう
ぜ」

「まじで？助かるわー、ありがとうな島！」

島の手招きに従い鐘井は後に続いた。購買でご飯を調達し、道案内のあとは次の教室
にきてご飯である。

「お、藤木じゃん。おーい藤木、隣いいか?」

ちら、とこちらが声をかける前にはすでに反応していた遊作である。さすがはリンクセンス、どうやら『星杯』デッキの『サイバース族』に反応しているようだ。すげーと思いつつ鐘井はこんにちは、と軽く笑った。

「島と転校生か。あいてるよ」

「藤木?」

「おう、うちのデュエル部の幽霊部員の藤木遊作だ」

「へー、そうなのか」

「俺は入るとは一言もいってないだろ」

「まーたそういうこといつちやつて。こいつ愛想ないけどいいやつなんだぜ?・ほら、さつき話してた助けに来てくれた藤木つてこいつなんだよ」

「あー、あの!」

「なんの話をしてるんだ、あんたら」

「なについてこないだのアナザーのことだよ」

鐘井は呆れ顔の遊作をみた。

「藤木……遊作……なあ、もしかしてマコト……君島マコトがアナザーになつたとき救急車呼んでくれた藤木つてもしかしてアンタか？」

びく、と遊作の眉が動いた。

「なんでそれを？」

「俺さ、マコトと豪快と同じ施設で育つた幼馴染なんだよ。俺が先にアナザーに感染しちゃつてさ、マコトんとこに引っ越す予定が数ヶ月もずれちゃつたんだ。昨日も夜中まで片付けしてたら手伝いに来てくれた豪快が教えてくれたんだ。マコトは知らな
いっていうしお礼いいたいのに困つてたんだよ。もしかしてと思つてさ」

鬼塚から外見情報とデンシティハイスクールの一年だという話まで聞いていたと言及すると遊作はあーと声をだす。ごまかしがきかないと思つたようだ。そこまで特定されて同姓同名の別人だとしらばつくれる理由はないはずだとでも考えたようだ。

「……なるほど」

遊作は一瞬迷ったのち、うなずいた。

「ああ、俺だよ」

「ほんとか！ よかつた、マコトほんとに感謝してるんだ、もちろん俺もだけど！ ありがとう！」

「いや、俺は当然のことをしてただけだ」

「気にするに決まつてんだろ！ マコトのやつ部屋の鍵もかけないでアナザーに感染しちまつたみたいでさ、ほんとに藤木が気づいてくれなきゃ別の事件に巻き込まれてたかもしれないんだ。ほんとに命の恩人だろ！」

まくし立てる鐘井に遊作はどこかホツとしたようなら顔をする。ポーカーフェイスだがよく見ると考えていることがわりと顔にでるタイプのようである。

そりやそりや、マコトの家を監視してアナザーになるまで見守り、あわてて無理やりぶち破つたのだ。ドアや鍵あたりには跡が残っているのだ。警察に入られたら指紋あ

たりからアウトである。鐘井がフォローしたおかげでマコトたちは警察にアナザー以外に被害届を出す気はないのだ。

「マコト、デュエル大会に優勝したりしてるし、多分そこから知ったんだよな？ マコトは藤木のこと知らないみたいだし」

「ああ、そんなところだ」

「やつぱり！ マコトすごいよなー、そ�だとは思つてたんだ。名が知られててよかつた。なあ、藤木。よかつたらマコトにあつてもらえないか？ あいつ、すげーお礼いいたがつてんだよ」

「別にいいけど」

「じゃあいつ空いてる？」

「俺はいつでも」

「それじゃあ今日の放課後とかは？」

「いいよ」

「じゃあなんか奢らせてくれよ、食べたいものとかないか？」

「……じゃあ、いい店知ってるからあとで連絡する」

「おーけー、連絡先はこれな」

「わかった」

「いやー幸先いいな。友達できるしマコトの恩人あつさり見つかるしよかつたぜ」

「なんだよなんだよ、二人で話しあんじやつて」

「聞いてくれよ、島！俺の幼馴染に君島マコトって隣のクラスの奴がいるんだけどさー」